

サリユ
Spiritual

VOL 3 2011 Winter

「今の時代、
貧魂社会」

ですよ。」これは「貧困」の誤植ではない。生きづらさが叫ばれる現代は、経済的な貧しさよりも魂の貧しさが問題だという意味だ。2003年の暮れに金光教の渡辺順一さんが立ち上げた「ソウル・イン・釜ヶ崎」に2006年から参加してきた川浪さん。軽妙な語り口ながら、言葉には重みと深みがある。

28歳のとき僧籍を得た。2004年に大阪城の仮設避難所の相談職員に就き、ホームレス支援に本格的に携わることを決意。就労意欲の有無を規準にした「一方的な支援と被支援ではなく相互の関係を支えたい」と、制度の運用でなく、宗教者としての活動に歩みを進めることにした。

「無量寿経で説く地獄と餓鬼と畜生のない状態、つまり戦争と貧困と差別のない状態に向け活動したい」。2010年12月、年の瀬に立ち上げた組織名にも、自身のこだわりを重ねた。「<無縁社会>と盛んに叫ばれたでしょ。

だからこそ、
“支縁”です。」

神仏と人間の関係の再生を求めて、長屋で語り合う「阿倍野Religion-Cafe」(川浪さん主宰)の活動情報はウェブにて(大阪市・阿倍野区昭和町、写真も)

2010年12月5日、應典院寺町倶楽部が主催した「寺子屋トーク」第60回に出講いただきました。

川浪 剛さん

支縁のまちサンガ大阪発起人代表・真宗大谷派南溟寺衆徒・49歳

「特集」変貌する葬送の風景
寺子屋トーク第58回
「遺族とく墓友」たち～「人生の最期」にこだわる仲間たち」
2010・7・13

寺子屋トーク第59回
「(葬式仏教)再生論!～日本のお寺に可能性はあるか」
2010・9・20

今こそ、 儀礼文化の 温故知新を。

本当に「葬式は、要らない」のか。



「坊主丸儲け」。そうした表現の中に「葬式仏教」という概念が埋め込まれています。「本来僧侶は死者の見送りや供養を担うのではなく、真理を追求する存在ではないのか。」そうした仏教の成立当初の原理に照らし合わせることで、現在の寺院や僧侶に対する批判が寄せられます。

事実、江戸時代の「寺請制度」や、明治時代の「神仏分離令」によって、僧侶は布教活動を通じた新たな関係構築ではなく、むしろ構築された関係の安定的な維持を中軸としてきたと言えます。とはいえ、高度情報化による価値観の多様化、また少子高齢化による都市の人口集中と長期にわたる人口減少は、そうした安定的な関係の維持を困難なものへと変えてきました。

こうした近代化を経る中でかろうじて継承されてきた葬式という儀式も、家族崩壊の現代、その儀礼や文化のあり方、僧侶の役割などを「従来通り」に維持していくことが容易ならざるものとなっています。

この夏から秋に、應典院では、公益財団法人JR西日本あんしん社会財団からの助成により、個人と向き合い、血縁を超えた、新たな葬送文化を模索する場を複数設けてきました。「葬式仏教」と呼ばれてきた日本仏教ですが、改めて葬送という人生儀礼の意味を問いなおし、日本仏教の存在感をどう打ち立てられるかに接近できればと願っています。

「葬式仏教バッシング」の逆風が吹き荒れた2010年。島田裕巳著『葬式はいらぬ』がベストセラーに躍り出て、最大手スーパー、イオンは僧侶派遣に加えて、「お布施金額」の明瞭化に出た。メディアはこぞつてこのテーマを取り上げ、仏教界に激震が走った。今、葬式仏教の何がいったい問題なのか？市場と消費が渦巻く世界の中で、改めて「弔いの文化」の真意を問う。

Spiritual
Opinion

生活とともにある 葬送とは ？

弘本 由香里
Yukari Hiromoto

大阪ガス株式会社エネルギー・文化研究所(CEL)特任研究員。筑波大学芸術専門学群卒業後、住宅建築専門誌『新住宅』編集員などを経て、1992年からCELの研究員に。大学や地域との協働で持続可能な住まい・まちづくりなどを実践的に研究。

時間を越えて、
つながりを融通する葬送へ。

近年、宗教界や学問の世界にとどまらず、一般の生活者に向けて盛んに論じられるようになった葬送や墓や供養をめぐる話の多くは、おおよそ次のような文脈で語られていると見てよいだろう。高度経済成長期、日本国内で地方から大都市圏への人口の大規模な移動が起き、かつての地縁から切り離された核家族が大量に誕生した。これらの個人化した都市住民が年を経て、1990年代ともなると、多くが郷里の親の介護や死、自らの老後や死に向き合わざるを得なくなってきた。そこで、かつての家や地域と寺が一体で成立してきた葬送や墓や供養のあり方と、現実の家族や生活との間に生じる矛盾に直面することとなった。旧来の慣習の形骸化に対する疑問も顕在化し、現代の家族事情・社会事情にマッチした新たな弔いの形が模索されるようになってきた、という捉え方である。

マクロな潮流としては、確かに間違っていないだろう。しかし、こうした潮流と事象を捉えるとき、どこに視点を置いて眺めるかによって、見えてくる景色や様相は異なったものになるのではないかと思えてならないのである。近年の議論の多くは、もっぱら高度経済成長期に都市に移動した核家族の側の視点で語られている。確かにそれは都市的マジョリティー(多数者)の見方ではあるのだろうが、そこで見えてくるものは一面の真実であって、異なる側の視点に立ったときにみえてくる他面の真実というものもあるのではないかと思うのである。

なぜ、私がそのような思いにかられるかといえば、私自身の生活履歴の中にその理由がある。極めて個人的なことではあるが、自らのバックグラウンドに触れることなく、死や葬送や供養の問題を語るのは難しい。あえて個人的な経験のいくつかを振り返りながら、この稿を書き進めることをお許しいただきたい。

一地方の 葬送の現場から見えてくるもの

高度経済成長期の1960年代に生まれ、中国地方の旧街道沿

いのごく小さな集落に実家を持つ私は、死と葬送のあり方が激変していく過程を目の当たりにしてきた。

たとえば、長命であった曾祖父が1970年代に老衰で亡くなっているのだが、当人が住み慣れた家の畳の上での大往生であった。そのときの雰囲気はよく覚えている。食事が喉を通らなくなると、もうじきお別れであろうと、親族が頻繁に出入りするようになり、根気強くその時を待ち、最後にかかりつけ医がやってきて臨終を確認した。こうした高齢者の死は「よいお参り(往生)でしたね」とみなで口々に尊び合い慰め合うのが常であった。そこでは、死ぬということは、ともかくあの世へ往生することと考える死生観が共有されていた。そして「いずれ私もあなたも、よいお参り(往生)」という願いやある種の覚悟、心の準備のようなものも含まれていた。これはいまだに、地元の葬送の場でのコミュニケーションの基本的なスタイルとして生き続けているように思う。

曾祖父の通夜と葬儀・告別式は自宅で営まれ、隣近所で構成される講内の人たちが役割分担し、炊き出しや受付などの実務を取り仕切ってくれた。当時の葬送儀礼には、地域の伝統的な習俗が色濃く残っていた。たとえば、出棺の際に家の前で茶碗を割る儀礼なども、講内の年長者たちに教えられながら遺族が行っていたのを覚えている。葬祭業者の力を多少借りても、葬式は地域で支え合うのが当たり前という共同体の規範があった。

1989年に母方の祖父が亡くなった際も、1997年に父が亡くなった際も、講内による支え合いは残っていた。どちらも病院での臨終であったが、それぞれに家族が傍に付き添って最期を看取った。そして、いずれの場合も通夜は自宅で営み、親族や親しい知人たちと故人の人柄を偲び、時には笑い話も交え、そのささやかな人生をせいっぱい讃えながら過ごした。葬儀・告別式は集落内にある寺の本堂を借りて会場とし、別の場所にある菩提寺から僧侶を迎えて行っている。寺の向かいにある集落内の公会堂(地域の集会所)は、講内の人たちが用意した膳が並び、会葬者に田舎料理を振舞う接待の会場となった。両菩提寺の住職は幼い頃から故人と長い付き合いがあり、葬式から四十九日に至るまでの毎週の法要の後は昔話に花が咲き、子どもや孫は「へえそ



死者に手をあわせ、祈る。

世代や家族が変わっても、残りつづけるものがある。

(写真:大蓮寺秋彼岸・2010年9月23日)

んなことがあったのか」と故人の過去を知る機会にもなった。未亡人となった祖母や母にとっては、最も身近な人の死を受容していくために欠かせない時間でもあった。

しかし、この頃からこうした形で執り行われる葬式は、目に見えて減っていったのも事実である。経済の衰退が進む地方都市にあって、大都市よりもずっと激しい勢いで増殖していったのが、民間の葬祭場であり、介護施設であり、ドラッグストアであった。皮肉にも、病・老・死に関わる一大マーケットは、地方都市での貴重な雇用の受け皿ともなっていたのである。伝統的な規範は徐々に影を潜めていった。

一般に、家族や就労形態の変化とともに地域共同体の崩壊が進み、葬祭業者による葬式の商品化が進んでいくとともに、葬送儀礼の画一化も進んでいったとされる。加えて、私には、もう一つ大きな動きが同時期に起きていた記憶がある。葬式における地域の伝統的な習俗の排除が、教団の意向として地方の寺々に伝えられていったと、祖父の葬儀の頃からしばしば耳にするようになっていたのである。教団を支えてきた地方の寺々と、その寺々を支えてきた地域共同体が崩壊していく状況に対して、本山の威光を強く行き渡らせることによって絆を回復しようとする願いがあったのかもしれない。しかし、地域性の排除は、教団としての宗教性を強化したいという意図とは裏腹に、葬式の商品化とマニュアル化、ひいては形骸化をいっそう推し進めていく不幸へとつながってしまったのではないだろうか。

各地に残る墓の多様性が物語るもの

大学進学とともに実家を出た私は、1980年代の半分を関東の農村部と東京とで過ごし、1980年代の半ばに関西に移り住んできて現在に至っている。大学時代をすごした関東の農村部には、土葬の習俗が生きており、両墓制(埋め墓と詣り墓)がとられ、野辺送りが行われていた。また、関西に移り住んではからは、時折歴史通の知人の案内で、中世から近世にかけて形成されていた惣墓(地域共同体の墓地)を、京都府や奈良県の農村部に幾度かたずねる機会を得た。この秋も生駒山の東側にある惣墓をたずねた。こうした惣墓は、今も地域の共同墓地として管理され、現役の

弔いの場として生き続けている。各地に残る墓の習俗を知れば知るほど、その多様性に目がくらみそうになるほどである。死と死後に対する人間の想像力の豊かさ、心の世界のありように圧倒されるのである。

『民俗小事典 死と葬送』(新谷尚紀・関沢まゆみ編、吉川弘文館)に掲載されている墓制には、「単墓制」以外に「両墓制」「無墓制」「男女別墓制」「年齢別墓制」などがあり、ここでは詳細な説明は割愛するが、墓の場所や弔いの仕方によって、屋敷墓、村墓、惣墓、子墓、合葬墓、埋め墓、詣り墓など、実にさまざまな葬送と墓と供養の習俗があることが説明されている。改めて気づかされるのは、死穢の忌避、畏怖、鎮魂、追慕といった心性とともにある、死と葬送をめぐる儀礼の存在こそ、人間が人間たる証であるという、根源的な認識である。

同事典の編者である新谷尚紀氏は、社会・経済の大きな変化の波を受けて、商業化が進む葬送儀礼の現状と今後について次のように述べている。「それらの変化の中心はあくまでも経済的レベルでのサービス提供に関することがらにとどまるものであり、かつ死体の処理とその技術に関するものにすぎない。一人の死者をめぐる靈魂の問題をどのように解釈し対応していくのか、一人の死者によっておこる社会関係の喪失をどのように回復していくのか、今後最大の問題点は、死と宗教の問題、死と社会の問題であるにちがいない」

絶えてしまった 檀家と菩提寺のつながりから

母方の祖父は、8人兄弟の末子であったにもかかわらず、家の跡取りであった。妻である祖母とともに、檀家として菩提寺を支えるつとめはもちろんのこと、仏壇や墓や神棚などの祭祀にかかわるつとめを日々怠ることなく大切に行っている人だった。しかし、祖父母の子供2人は女で、2人とも他家に嫁いでいった。祖父にとって、先祖から引き継いだ家を絶やすということは、想像を絶するつらさだったのではないかとも思うが、淡々と家が絶える日、つまりは自分と妻が亡くなる日に向けた準備を進めていた節がある。

その一つが、生前からせつせとお布施や寄進や奉仕につとめ、元気なうちに戒名を授かっていたことである。当時子供であった私には、その意味がまったく理解できず、それこそなぜ大人はこんな名前のために大金を使うのだろうかと思議に思っていた。しかし、今になって思えば、それは祖父なりの、先祖へのお詫びであると同時に、子や孫に憂いや重荷を残すことのないようにとの愛に満ちた死に支度であったのだろう。晴れ晴れとした表情をよく覚えている。遺産相続などの遺言も早々と用意していた。

祖父の死から17年後の2006年、祖母が亡くなった。体が不自由になってからは特別養護老人ホームで過ごし、施設内で迎えた92歳での最期であった。娘である私の母は病のため入院中で、喪主をつとめることができず、孫である私の弟が喪主をつとめ、私たち孫の手によって簡素な通夜と葬儀・告別式を行った。講内による葬式ではなく、葬祭場の座敷の間を借りてのささやかな弔いであったが、まだ存命の講内のお年寄り方や、親族など親しい人たちが駆けつけ、頼りない私たちを気遣ってくれた。祖母の亡骸を迎えに行き、生まれて初めて喪主の役を担った私の弟とその妻は、この小さな葬式を機に自分たちはやっと大人になり地域の一員になった気がすると振り返っている。葬式の大小にかかわらず、葬送が人の成長の通過儀礼の意味を持つことを物語っている。

寝たきりの生活が長く続き、夫である祖父亡き後の晩年、さまざまな苦難を味わった祖母であった。慎ましく生きた祖母が、なぜそんなにつらい経験をしなければならなかったのか、そんな思いが頭をかすめる。残されたものにとって救いとなったのは、祖父と祖母が生前に重ねてきた菩提寺との親交であった。住職は、祖父母が元気だった頃の様子を懐かしく物語り、生前に積んだ小さな徳の数々を讃えてくれた。そして、「孫たちで葬式を出してくれて、おじいさん・おばあさんも喜んでいでしょう。家は絶えなければ、寺で菩提を弔うので心配することはない。おじいさん・おばあさんが、十分尽くしてくださったのだから」と語った。その後も、私たち孫は法事のたびに寺をたずねている。檀家としての関係は絶えてしまったものの、縁者としての関係はふくよかにつながり続けているのである。

寺の側に立てば、檀家がなくなるという事態に、地方都市の寺は大都市よりずっと早くから直面してきている。それは、寺や教団の存亡の危機でもあるが、一方でその危機に対して、伝統の知恵を活かして向き合い、新たな関係性を生み出している例が少なからずあるのではないか。伝統の側に芽生えている柔軟な動きに目を向けて見る価値は高いと思う。

生活者の側に立てば、継承者が絶える痛みを密かに抱える人が増加していくのは明らかだろう。家族の個人化や社会の無縁化が進むほど、寺は故人の記憶を継承し、命の尊厳やつながりを担保し、救いをもたらす場としての役割を期待されていくのではないだろうか。そこに、次の時代につながる光明が見出せるのではないかと思うのである。

葬式仏教は“成仏”するか

9月20日寺子屋トークで語られた島田裕巳氏の講演は大変刺激的なものでした。当日、應典院では共通のキーワード(ハッシュタグ)をつけ、ツイッターで内容を同時中継。本欄では、そのコメントの一部を抜粋して抄訳とします。すべてを採録しておりませんので文責は編集部にあることをお断りしておきます。なお関連する投稿が佐藤哲朗(@naagita)さんによってまとめられています(http://togetter.com/li/52178)ので、どうぞ参照ください。

▼今日は葬式仏教のインシエーションの機会になればと思っている。つまり、一旦これまでの葬式仏教には死んでいただかないといけない。果たしてそこから生まれ変わるか、再生するか。▼本『葬式は、要らない』、歌「千の風になつて」、スーパーによる僧侶紹介事業によつて、葬式仏教が揺らいでいる。私は全日本葬祭業協同組合連合会から抗議文を受け取った。またイオンによるサービスの件で全日本仏教会も先日シンポジウムを開いた。▼とりわけ、今、お墓がないということが相当大変だと思ふ方が増えて来ている。高級車一台分くらいの値段に、でなければ、どこに遺骨を置いたらいいのか、遺骨を誰が引き取るのか、とい

つたのではないかしら。しかし、介護にお金を使っていくと、その後の面倒を見るお金や気力がなくなっていく場合がある。そのとき、供養を続けていく意味が見出されにくいのでは?▼戦後に火葬文化は特に広がる。そして、各家が家の墓を持たなければならなくなった。江戸の時代は名字がない人もいた。明治以降、墓をつくりたい人たちが立派な墓をつくるようになった。戦後の技術革新もあつて、朽ちやすい大谷石ではなく御影石が用いられたり;▼火葬そのものの技術も高まった。それは骨揚げの儀式のために、きれいに焼かれるようになった。ところが「焼き」が入っていることもあつて、丈夫で、自然に還りにくい。散骨を

しても、粉のままに残ったりする。今、生命として、有機体としては死んでも、骨が残り、「死にきる」ことができない。成仏や浄土という概念によつて、弔い上げという習俗も意味を持つていた。「大往生した」と言われる方々を、どこまで供養するか?そもそも仏教はけじめをつけるためにあつた。▼死にきれない人たちに供養だと言ひ、葬式仏教ができた。が、葬式、戒名、墓の困りごとを解決してこそ、仏教ではないか。遺族の精神的なケアが大事なら、無料でやりなさい、と思う。お金をいただかないでやつていくならば、大切という意味もわかる。▼宗教学者の山折哲雄さんが、「酸化炭素の排出の問題から、火葬の問題点を

指摘していた。世界的にエコロジーの問題が進んでいる。そこで土葬でも火葬でもない方法として、フリーズドライがスウェーデンで開発され、来年には韓国でも始まるようになったそう。▼フリーズドライで葬送されたら墓はどうする、ということになるだろう。そこに、エゴからエゴの視点が重なる。自然に還ることはいいいこと、と思う人たちが多なかで、葬られ方については発想が縛られている。もつと自由に考えていつてはどうか。▼財産などを残しても、遺産相続でもめるだけでは?お寺に遺贈する、そういう機能を寺院が果たしてもよいのではないか?自律的に考える、そうした手がかりを見出しただければと思う。■

from
twitter

應典院のツイッター
http://twitter.com/ouenin
寺子屋トークのハッシュタグ
#terakoyatalk

出会い直し紡ぎ直す
知恵を媒介する

2010年9月20日に應典院で開催された寺子屋トーク「葬式仏教」再生論!日本のお寺に可能性はあるか」に講師として登場した宗教学者・島田裕巳氏は、長寿の高齢者は十分生をまっとうしているのだから、ことさら懇ろに弔う必要はないのではないかと語っている。しかし、私の実感からすると、長寿になればなるほど不安要素は増え、孤独は募り、晩年になればなるほど若い頃には想像さえしなかった苦難にさらされていく可能性が高い。物理的な死の処理という断片的な問題ではなく、当事者のみならず縁者を含め、死に向かって生きる日々の心の問題としての葬送や供養のあり方が問われていると考えるべきだろう。

また、たとえば親の介護や死に向き合っていくときなど、共通の規範を失い個人化した現代の家族は、それぞれの価値観を持ち寄り、ぶつかり合いながら、改めて出会い直し、関係を紡ぎ直すというプロセスを経ていかざるを得ない。出会い直しや関係の紡ぎ直しは、ときに決裂し深い傷を残してしまうこともある。成功するにしても、失敗するにしても、いずれにしても大きな痛みを伴う経験であることに変わりはない。

死に向けた長い時間をいかに生きていくか、何を寄る辺に心の安定を得るか、出会い直し・紡ぎ直しの媒介者としても、時間を越えた超越性を持つ第三者たる僧侶と寺が果たし得る役割は大きいはずである。

2010年7月10日に應典院で開催された寺子屋トーク「遺族と〈墓友〉たち」の講師・井上治代氏がNPO法人エンディングセンターで取り組んでいる樹木葬墓地「桜葬」は、家族や縁者の出会い直し・紡ぎ直しの典型例だと思うが、こうした非継承墓の先駆けが1990年前後に大都市ではなく地方の寺院から生まれてきたのはなぜか。生死に関するぬきさしならぬ心の問題を敏感に察

知し、救いの手を差し伸べられる、無縁をつなぐ場であり寄る辺ともなる、時間を越えた超越性を担保する場と職能。時間によって造形されてきた、やわらかで可塑性に富む知恵が必要だということの現われではないだろうか。

人間が生きていく上で避けられない矛盾や葛藤を受け止め支えとなってきたのが、葬送をはじめとする儀礼であり文化である。そこには本質的に世の矛盾を受け入れるキャパシティがある。先の寺子屋トークでの島田氏との対談で、大蓮寺住職・應典院代表の秋田光彦氏が語った、伝統仏教の儀礼の中にある知恵を現代社会の中に焼き直し、上書きしていくことが重要との指摘に通じる。

おわりに

極めて個人的な経験をもとに、ここまで稿を進めてきた。信仰心篤い地域や家に育ったと思われてしまったかもしれないが、実は私の父は島田氏同様に、形骸化する葬式仏教に厳しい目を向けていた。墓参りさえ嫌った父であったが、その根源には、父の父である祖父の原爆死と、結局見つからなかったその遺体を探して、累々たる死者のまちをさまよいつつ、無数の死に立ち合った少年の心が生き続けていた。死と生がいかに深く呼吸しあっているものであるか、痛切に感じざるを得ない。無数の死に向き合い続けて生きてきた父の死に際は、見事なものであった。家族を喜ばせようと、思い出の歌を力を振り絞って歌っての最期だった。臨終の場は感動に満ちあふれた。

日常の生活の中に、無数の死者と生者の対話があること、だからこそ個人化・無縁化が進む時代に最も大切なことではないか。この稿の執筆の機会をいただいたことで、ここに書くことのできなかった人たちを含め、多くの故人と対話できたことに深く感謝したい。



新・お葬式の作法
—遺族になるということ—

葬儀のあり方の変遷を知ると、時代の背景と様相が浮彫りとなる。高度経済成長期には地域の習慣によるかつての葬送儀礼が合理化され、バブル経済崩壊によって90年代以降は葬儀の多様化が進んだ。晩婚化、非婚化、家族の崩壊、少子多死社会、価値観の多様化は死の儀礼を単なる「死体の処理」と扱っことを肯定した。それらの現象はよく言えば「個性化」だが、家族の分散解体、高齢者の増加で直葬や散骨という葬送の簡略化が進めば、「死者を想つ」心は確実に欠落していく。そこには「きわめて人間的な」弔いの作法はない。極端な葬式の簡略化は「死者とのつながり」を断絶するのだ。生老病死のプロセスを踏まえない現代の死生観に「抹の危険性を感じている」著者は、今こそ「葬式の作法」をしっかり学習し、遺族本来のあり方を取り戻そうと訴える。

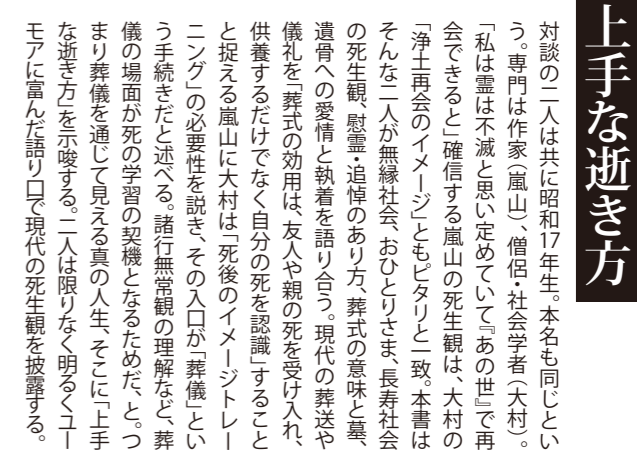
碑文谷 創 著
●平凡社新書(740円+税)



上手な逝き方

対談の二人は共に昭和17年生。本名も同じという。専門は作家(嵐山)、僧侶・社会学者(大村)。「私は霊は不滅と思いついて『あの世』で再会できる」と確信する嵐山の死生観は、大村の「浄土再会のイメージともヒタリ」と一致。本書はそんな二人が無縁社会、おひとりさま、長寿社会の死生観、慰霊、追悼のあり方、葬式の意味と墓、遺骨への愛情と執着を語り合う。現代の葬送や儀礼を「葬式の効用は、友人や親の死を受け入れ、供養するだけでなく自分の死を認識」することと捉える嵐山に大村は「死後のイメージトレーニング」の必要性を説き、その入口が「葬儀」という手続きだと述べる。諸行無常観の理解など、葬儀の場面が死の学習の契機となるためだ、と。つまり葬儀を通じて見える真の人生、そこに「上手な逝き方」を示唆する。二人は限りなく明るくユーモアに富んだ語り口で現代の死生観を披露する。

嵐山 光三郎・大村 英昭 著
●集英社新書(735円+税)



お墓は、要らない

確かに墓を必要としない人たちがネット上で増えている。墓を選ばない人は散骨・手元供養・樹木葬などの葬送を選ぶ。そこには年間三万二千人に及ぶ無縁死者、自然に戻りたい願望者、先祖と断絶された人々がいる。著者は「家墓の歴史」を顧みつつ、現代人の葬送、墓、供養のあり方を探る。納骨堂を設けた天台宗東雲寺、共同納骨堂「吉羅林宮」で供養する曹洞宗岡本寺、生前契約による画期的な個人墓「自然」を開設した浄土宗大蓮寺、骨仏で供養する「心寺」などを取材し、今後の「供養ネットワーク」に大きな期待を寄せ、家族形態の変化、社会環境と「制度疲労」による「先祖崇拝」を軸とした人間関係の崩壊。果たして「イエ」に代わる供養の共同体は「自分の死後の住処」となり得るのか。「イエ」墓を通して宗教意識は本当に消失してしまうのか。本書はそんな現実に本音で疑問を投げかけ、真の縁起を求める姿勢が見える。

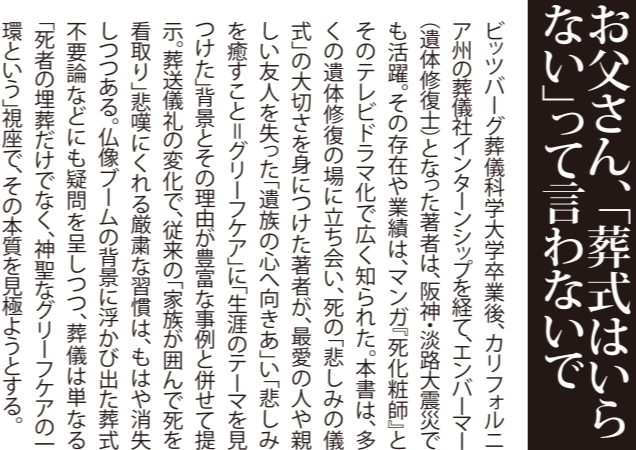
高橋 繁行 著
●学研新書081(700円+税)



お父さん、「葬式はいらない」って
言わないで

ビッグバグ葬儀科学大学卒業後、カリフォルニア州の葬儀社インターンシップを経てエンバマー(遺体修復士)となった著者は、阪神・淡路大震災でも活躍。その存在や業績は、マンガ「死化粧師」とそのテレビドラマ化で広く知られた。本書は、多くの遺体修復の場に立ち会い、死の「悲しみの儀式」の大切さを身につけた著者が、最愛の人や親しい友人を失った「遺族の心へ向きあい、悲しみを癒すこと」に「グリーフケア」に「生涯のテーマ」を見つけた背景とその理由が豊富な事例と併せて提示。葬送儀礼の変化で、従来の「家族が囲んで死を看取り」悲嘆にくれる厳粛な習慣は、もはや消失しつつある。仏像ブームの背景に浮かび出た葬式不要論などにも疑問を呈しつつ、葬儀は単なる「死者の埋葬だけでなく、神聖なグリーフケアの一環」という視座で、その本質を見極めようとする。

橋爪 謙一郎 著
●小学館101新書(720円+税)





出席者

尾角 光美
Live on代表

寺本 恵美子
オフィスシオン専務取締役



秋田 光彦
浄土宗大蓮寺住職・應典院代表

福井 智行
真宗興正派称名寺住職・自死に向きあう関西僧侶の会事務局長

Table Talk

グリーフワーク としての 葬式仏教

生と死の連続性を見つめて

葬式仏教への逆風の中から、ひとつの視点が注目を集めている。

死別の悲嘆をいう「グリーフ」だ。「遺族ケア」といってもいい。

言葉は新しいが、葬式仏教の矜持とは、

その「グリーフサポート」にあったのではないか。

いや、その言葉から、

現在の葬式仏教が抱える欠陥も浮かび上がる――。

僧侶、葬儀社、市民という、グリーフにかかわる三者の立場から、

葬式仏教の現在を問い直す。

司会 秋田 光彦

今、人々が葬儀に対して 感じる違和感

●秋田 はじめに、簡単な自己紹介をお願いします。

●寺本 21歳から20年間お葬儀の仕事をしています。長年、葬儀社向け人材派遣の仕事をして、数多くの葬儀社と関わるなかで違和感を感じるようになり、5年前に「その人に合うお葬儀を準備しよう」と事前相談の会社を始めました。今は、家族葬を専門に扱う『オフィスシオン』で、費用をかけずに思いのこもったお葬儀を作るお手伝いをしています。

●尾角 8年前に母を自死で亡くしたことがきっかけで『あしなが育英会』に出会い、親を亡くした子どもたちを支えるグリーフケアの活動を始めました。2006年に自殺対策基本法が成立してからは、各地で講演活動もさせていただいています。

今は、應典院に会場をお借りして『グリーフタイム』という場を開きながら、任意団体『Live on』の代表を務めています。最終的には、大切な人を亡くした人が欲しているケアが確実に届く社会を作っていくことが大きなミッションだと考えています。

●福井 僧侶です。最近、自死遺族に集まっていた自死者追悼法要や、お寺で遺族

の話や聴く機会を設ける活動を始めたところです。自死遺族のケアを通じて、今のお葬式でグリーフケアができていくのかと思いましたが、お葬式はグリーフを行う大切なツールだと思えますが、現状では活かされていないのではないのでしょうか。葬儀社との連携もなく、どうすべきかと話し合いを持つ機会もありません。そんななか、尾角さんに話し合いの場を作ろうと声をかけていただいて今日の座談会に参加させていただいています。

●秋田 寺本さんが、いろんな葬儀社を見て感じられたという違和感についてお聞きしたいのですが。

●寺本 お葬儀で一番大切なはずの、悲しんでいるご遺族の気持ちが置いて行かれることですね。また、生前にお葬儀のことを考えて準備していない人があまりに多いし、葬儀社もそうした人たちの無知を利用して商売をしているところもあります。働きながら、心温まるようなことが欠けているように感じていましたし、ご遺族の気持ちに寄り添うどころか、触れようとしていなかったような気がします。

共同体の喪の営みから 「マイ葬儀」へ

●秋田 かつての日本の葬儀は、共同体全体の喪の営みであり、儀礼を通じて死を受け止めて行くグリーフの場でした。しかし今、日本のスタンダードは家族葬になりつつあります。それによって葬儀の在り方の個人化が進み、個人の価値観や嗜好に沿った「マイ葬儀」へと変えたのではないのでしょうか。

●尾角 若い人に葬儀で印象に残ったことを聞くと「お父さんの好きな音楽がかかってよかった」など、葬儀のデザインに焦点が当

たっている印象があります。僧侶の側を見てみるとすばらしいケアをしている方もいますが、ご遺族の側からは「すばらしい僧侶が葬儀をしてくれた」という話は聞きませんね。

●寺本 家族葬が好まれる風潮が生まれた背景には、会館葬になったことが大きいと思います。地域のお寺や自宅の葬儀では、ご近所や親せきが手伝わないとできませんでした。また、お寺では山門を入れば聖域ですから自然と宗教性も感じられます。葬儀会館は、おもてなし設備としては良かったのですが、お寺さんも控室に隔離されて、家族と語らう機会もなくなってしまいました。そのあたりから何か欠けてきたのかなと思います。

●福井 通夜や葬儀では、大きな祭壇が設えられ、私たちはすごい衣を着て儀式装置の中に入ってしまう。亡くなられてまだ数時間というときに行われる枕経は、ご家族と僧侶が生身で触れ合うすごく濃密な時間になりますね。最近は枕経すらなくなりつつあります。ところが、葬儀社さん任せになって葬儀の役割が分業化してしまい、ご遺族の思いに踏み込むチャンスを失っているように思います。

●尾角 今、葬儀社は生前契約を獲得するために事前説明会を数多く展開されていますね。お料理をどうするか、お花はどうするかといかにして消費者を引き寄せようかとして。個人の嗜好を葬儀に表現することと、遺族一人ひとりのグリーフに向き合うことはまた違うのではないのでしょうか。

グリーフが生と死をつなぐ

●寺本 オフィスシオンには、亡くなる前か

ら家族が相談に来てくださる方が多いんです。とはいえ、生前契約ということではないので、見積もりを置くことはほとんどありません。お会いしたりお電話でお話することからグリーフは始まっているように思います。突然、葬儀のご依頼があると「私たち、葬儀社さんみたいだね」とビックリするくらい(笑)。事前相談を中心にスタートしたものですから。

●秋田 お電話ではどんなことをお話されるんですか？

●寺本 葬儀に関する以外には、ご家族の方から「今日はおしっごがでないの」「今日はすこし元気なのよ」とか毎日電話がかかってくる。お話を聴かせていただいていると、今は親子でも相談したり悲しみを分かち合える相手がない人が多い印象を受けます。

●福井 お檀家さんにお参りに行っても、そんな風に体調のご相談を受けることはありませんね。「お加減はどうですか？」と聞いても「お布施はどうですか？」と葬儀の相談をされたりする。それは、これまでの関係のまずさのせいなんでしょうけど。

●尾角 寺本さんのお話はまさしく理想ですね。死を間近に控えた人と何を話したらいいか、何をしてあげられるかということは、家族間でも話すことが難しいです。亡くなる人とのコミュニケーションをとるのか、自分の感情とどう折り合いをつけるのか、そういう思いに揺れるときにきちんと支えてもらえていれば、亡くなられた後のグリーフの深刻さを軽減できるのではないかなと思います。いいお別れを目指して、最後のコミュニケーションを取ることとはとても大切なことだと思いますね。

ただ、一般的にはお金の心配が先立って事前相談を希望される方が多いのかなと思います。愛する人の死にどう向き合っているかわからない気持ちを、おつきあいのない葬



福井 智行

1974年生まれ。大阪府門真市の真宗正派名寺住職。2009年より自死の問題に関わり始める。現在、「自死に向きあう関西僧侶の会」事務局長。毎年12月には大阪で「自死者追悼法要」を行う。

ートに必要だという観点から、アメリカが輸入してグリーンケアに取り入れていますね。その習慣をなくしていくことによって、日本の葬儀からグリーンケアが失われつつあることに気づいていない人が多いように思います。

市民が見る葬式仏教バッシング

●尾角 ご遺族の視点から見た葬式仏教バッシングは「点の支え」ではダメだろうということだと思います。何年も会わない僧侶が現れて、ちょっと話をしてすぐ帰る。そんな人になぜこんなお金を払わなければいけないのか、なおかつその行為にご遺族が傷ついてさえいることではないでしょうか。昔は、仏教を理解したうえで、大きな物語のなかに葬儀があり、それは生と死をつなぐものだったはずですが、市民の側も死者をどう送るのかを考えていないと思うんですね。結婚式について考えるのと同じくらい、お葬式についても生きている間に考えるきっかけがあれば、こうしたバッシングは起きないのではないのでしょうか。バッシングの原因には、市民の側の思考停止状態もあるでしょうね。生前からつながりのあるお坊さんや葬儀社の方と、家族と亡

くなっていく人を含めて話をして考えれば、いいお葬式ができると思うんです。

●秋田 たしかに、顔なじみのお檀家さんの葬儀では涙ぐむことも少なくありません。でも、顔なじみの親近感で結ばれることが無上であって、宗教性によるつながりは棚上げでいいんだらうかと思えます。そこにこだわるのは、僕たち僧侶だけなんだらうか？

●福井 本来は、たとえ二泊三日であっても、生きているものと宗教が一瞬でも交錯する場面なのに、葬儀社任せにしてしまって交錯すらしていないということを言われているのではないかと思います。正直、一番つらいのは、関係を作れないままにお葬式に呼ばれるときですね。せめて、せつかく葬儀でつながった関係をそこで終わってしまわないようにしたいです。葬儀社と一緒に対策を講じてでも、何とかそこから関係を始められるように考えたいし、さらには宗教性へもつなげるようにしたいと思うんです。

●尾角 葬儀において、ご遺体を運んだりいろんな用意をしてくれる葬儀社は必要だと思われていますが、宗教家が必要かどうかはものすごく問われていると思いますね。

●寺本 仏教の入り口が葬儀だけになってしまっているのが現状とするなら、葬儀社さんまかせの葬儀からもう一度取り戻すことが

大事なのではないでしょうか。

葬式仏教の再生から共同体の再構築へ

●秋田 最後に、みなさんからお寺と僧侶に対する提言をお願いします。

●尾角 僧侶に対しては、死者とご遺族のメディアであってほしい。社会のなかで、亡くなった人について共有する役割を担える存在だと思います。ご遺族は、どこでも死者について語れるものではないですから。ご遺族は、命日や季節行事にふつと死者を思い、つらくなる“記念日反応”を起こすことがあります。死者を思いだす日に、月参りや法事にやってきて死者を共有し、死者との関係を回復させるのは僧侶の大切な役割なんだらうかと思えます。

ご遺族がグリーンケアにおいて求めることは生活圏のなかにある支えです。コンビニの2倍もあるお寺の数にはすごい可能性がありますよね。たとえば、ご遺族がつかいクリスマスや正月のような行事の時期に、グリーンをテーマに集まれる場所を作ったり、お寺が開かれていてご遺族が安心していられる場所になったらとてもいいと思います。お寺とお坊さんがそんな風に機能すれば、生と死をぐっと自分に引きつけて大切にできる社会になり、私たちみんなが幸せになるんだらうかと思うんですよね。私たちはみんな、いずれ遺族になるわけですから。

●寺本 見栄や世間体で、見たこともない人のお葬儀に参列するのではなく、悲しみを介して心がつながることによって、人は悲しみから再生することができるんじゃないかと思うんです。私はいろんなご縁をいただきますが、お葬式が終われば7日ごとにご遺族に付き添うわけにもいかず、せいぜい年に一度お会いするくらいです。お寺さんにとって、7日ごとにご遺族に寄り添う機会があることはチャンスだと思います。一緒にお茶を飲んでゆっくりお話する時間を作っていて、「お元気ですか？」「ごはんは食べられていますか？」という言葉をかけていただだけでもいいんです。私た

ち人間はすごく弱いものですから、お別れ会や音楽葬ではカバーできないことが宗教にはできるのではないかと思います。

お寺で葬儀をしましょうよ、と呼びかけるのもひとつの方法かもしれませんね。来ていただければ、ちょっと一時間行って帰るという関わりではなく、通夜から葬儀のすべての時間に関わることになるのではないのでしょうか。「エアコンの温度はこれでいいですか？」「お茶はこのポットにありますよ」ということからもお話ができると思います。

●福井 いいお葬式とは何かを考えることから始めて、本当にいいお葬式をしたいです。ご遺族にとって大切な人を失うという一番苦しい場面にご一緒させていただきたい。自死遺族の方とお話させていただいていると、たとえ一時間でも来たときより明るい表情で帰られることがあります。回復されるのはご自身の力ですが、ゆっくり回復していただく場を私たちは葬儀で提供できるはずですよ。

●尾角 立場によって、誰のための葬儀なのか違っていているように思います。生前契約をしてご自身の葬儀を考えられる場合は故人の意思による葬儀でしょうし、亡くなった後のことになるとやはりご遺族のための葬儀になるでしょうね。葬儀社が葬儀をするのは、自社のためなのかご遺族のためなのか。お寺は誰のために葬儀をしているのか、と。私たちは、ご遺族にとってのいい葬儀をしたいということから始めて、みんなで対話のテーブルを作っていきたいですね。

●秋田 僕は、宗教的な意味が核にある限り、葬儀の中心は死者だと思います。もちろん死者のためだからとご遺族をなおざりにするわけではありませんが、死者が忘れられている葬儀が多いように感じます。儀式の一点である限り、葬式仏教は完成しません。みなさんがおっしゃるように事前の関係性の中で、ゆっくりと死を見通しながら、その手前の生をどう生き直すのか、その気づきがあってこそ、そこに宗教的な営みをつむぎだすことができるのではないかと、思っています。ただし、生涯全般に関わっていく葬式仏教にするためには寺だけの力では無理です。葬儀社や市民と手を携えながら、生まれ変わっていく可能性を信じたいですね。



寺本 恵美子

2000年より奈良県に拠点を置く「オフィスシオンの葬祭ディレクター」として家族葬を専門に取り扱う。葬儀の仕事に興味を覚え、1989年に葬祭スタッフ派遣会社に勤務。2000年に専務取締役として家族葬専門葬儀社「オフィスシオン」設立。メモリアルサービス事業部代表。

<文・構成>
杉本 恭子(すぎもと・きょうこ)
現在『彼岸寺』ウェブサイトにて『坊主めぐり—現代名僧図鑑』と題したインタビューを連載中。
<http://higan.net/blog/bouzu/>

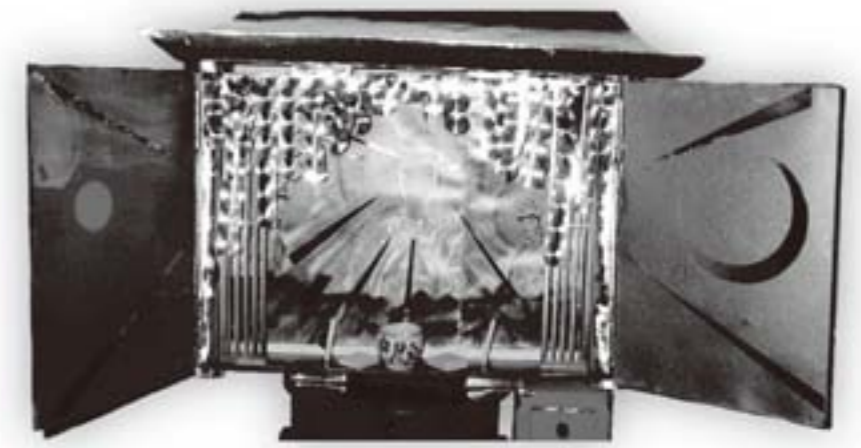


尾角 光美

同志社大学在籍中。グリーフのサポート、ケア、学びの機会を提供する任意団体「Live on」代表。102年目の母の日、「亡き母のメッセージ」(長崎出版)の編者。ひまわりと蓮が好き。

手製の仏壇に 重ねられる 二人の「生死」

看取り・介護の体験から考える、
葬式仏教再論。



母のために作った仏壇 (提供・高橋 繁行さん)

10年前、年上の友人Oさんが亡くなりました。生前、よくケンカもし、時に殺したいと思うほど憎んだこともありましたが、私にとって真のともだちといえる人でした。

2000年12月初め、Oさんは末期肝臓がんの宣告を受け、死後のことを私に託しました。Oさんと私、それともう一人の友人女性の三人は、そのさらに10年前、お互いだれか先に死んだら、残されたものが葬式をするという約束をしていたのでした。離婚の過去や未婚独身と、それぞれの個人的な事情は異なりましたが、その時点で3人とも一人暮らしだったことも、約束をした理由です。

Oさんの希望は「家で死にたい」ということだったので、私は往診医を探し、医師と訪問看護師がOさんの住んでいた賃貸マンションを訪ねるようになりました。共通の何人かの友人(主に女性ですが)に声をかけ、Oさんの看取りの看護をする“互助看護団”を作りました。Oさんは他県に住む一人息子にその旨の連絡を入れました。亡くなったのは年が明けた1月3日の朝でした。

その朝のことは今でも忘れません。私は前夜から泊り込み、Oさんの隣の部屋でうとうとしていたとき、もう一人の看取りの女性が「Oさんの呼吸がおかしい」と飛び込んできた。すぐに寝室に行くと、Oさんのあごががくがくとゆれていました。目は虚空の一点を捜し求めるかのようにさまよいました。Oさんの手を握り締めました。あごはいましばしゆれ、Oさんの目は行き先を定めたかのように虚空の一点に釘づけされた。ス——と息は途絶えました。

生死二面に分かれたOさんと私は、看取りの瞬間を境に急激に没交渉になったと感じました。寂しさでいっぱいになりました。

1

看取りと見送りの中で

Oさんはどこへ逝ったのでしょうか。看取りの最中にもこんなことがあった。われわれ互助看護団の仲間の一人で、ヒカリちゃんという女性が見舞いに来たとき、Oさんは言いました。

「ヒカリ、わし、もうすぐあっちに逝くからな、おまえもはよ来い。

待っとるで」

「私が逝くまでOさん、何してんのん」とヒカリちゃん。Oさんは「天国で神さんに議論ふっかけケンカしとるわ」

看取り中、私自身の心にも変化がありました。毎日Oさんの家を訪ねる道行きの、天神橋商店街の喧騒の風景がやけに輪郭をはっきりさせ、夢の中の心象風景のように感じられ、ここがこの世なのかあの世なのかわからなくなりました。浄土真宗の人は、死後成仏でなく、生きている間に往生することを説くと言われます。それと同じような心境なのかどうかわかりませんが、あの世とこの世は地続きで繋がっているという奇妙な実感がしました。

Oさんが亡くなった後二晩、通夜をしました。他県に住む息子夫婦・子もやってきました。ただただ酒を飲み続けただけの通夜でしたが、明日は火葬という日の夜、ヒカリちゃんはドライアイスで冷たくなった遺体のOさんにひしと抱きつき、こう言いました。

「Oさ——ん、こんなに冷とお冷とおなって可哀想。明日は熱う熱うなるからねえ！」

座をはじけたように爆笑の渦となりました。笑い声は声が枯れるまでいつまでも続きました。声途切れるとふいに悲しみが襲いました。看取り中、Oさんとたくさんのことをしゃべったヒカリちゃんの最後の饒の言葉だったと思います。

2

弔いの意味を問う

Oさんの死の2週間後、居酒屋もりもりという店で生前かかわりのあった人々に案内を出しお別れ会をしましたが、葬式という「式」はしていません。お坊さんもお呼びしていません。ただ、それだけにかえて遺体とどう向き合えばいいのか、Oさんのために何を祈ればいいのか、葬式仏教と批判的に言われる弔いの意味についても、より深く考えさせられたと思います。

それから数年後、Oさんの死から学んだこととはまったく対照的な体験をしました。京都市に住む私の母が認知症になったの

です。手に負えないほど認知症の周辺症状がひどくなり、私はもの書きの仕事が無期限休業することにし、介護のために実家に通うことになりました。

母のために何をしてあげられるだろう。

私は、父と夫婦二人だけで生活していた隠居宅の母を見ながら、考えました。家族で彼岸の墓参りに行ったとき、ふいに閃いたのが、仏壇を作ってやろうということでした。隠居宅に仏壇はなかったのです。

手製の設計図を引き、仏壇に安置する阿弥陀仏を描き、ボール紙や絵の具を買ってきて作り始めました。作業中、母は不思議そうに眺めていました。

「なに作ってんや」

「仏壇。おかんの病気を治すためや」

「私の病気ってなんや」

「ボケや、おかん、よう、物忘れをするやろう」

「そうか私はボケか、ふっふっふ」と上機嫌そうに笑いました。

3

仏壇を前にして

一ヵ月後、仏壇はできました。近所の菩提寺の住職に仏壇の性根入れを頼みました。たかがはりぼての仏壇だからこそ、仏壇に魂を入れておきたかったのです。

翌朝から、朝、夕、寝る前の三度ずつ、母は仏壇の前で、般若心経を唱えるようになりました。ちょっとどきどきするほど、さわやかな顔色になっていました。しばらくして母の症状は目に見えて回復してきたように見えました。その後紆余曲折があり、認知症も進み、今はグループホームに入居していますが……。認知症の周辺症状で、地獄を見たような形相をしたこともありましたが、仏壇の前の母は仏様と戯れ遊んでいるかのようにでした。

母は尼講という村の念仏講に入っていて、ご詠歌、和讃など念仏をうたえます。いずれ母が亡くなるときには、尼講の老女たち

の、鈴の音とご詠歌に包まれ、見送られることでしょう。チリーンと響く鈴の音色、それはたしかにあの世から聴こえてきたと錯覚させるほど美しい音色です。

4

ゆるる弔いと供養

Oさんの死、母の介護という、この二つの体験の間で、今も私はゆるれています。Oさんの事例は、葬式仏教を否定し、新しい弔いを模索したといえるでしょうし、母の場合は、村落共同体で仏教的に編まれた鎮魂のプログラムの生きた事例といえるでしょう。

私は葬式仏教ということを必ずしも否定的に申しません。むしろ日本の仏教は、死者に接し、日本人の靈魂観や民俗信仰、祖先崇拝を掬い上げることで、日本人の精神生活をより豊かにしてきたと見ています。母を見ていてそう思います。

ただし、Oさんの死は、まさしく今始まりかけている無縁社会の人間関係のなかで、どのような弔いや供養の絆を作っていくかという問題です。そこから新たな鎮魂のプログラムというものを考えていきたい。二つのものを一つにしようと、今もゆるれています。

高橋 繁行(たかはし・しげゆき)

1954年京都府生まれ。ルポライター。「高橋葬祭研究所」を主宰し、『お墓は、要らない』(学研新書)、『寺、墓、葬儀の費用はなぜ高い?』(飛鳥新社)、『葬祭の日本史』(講談社現代新書)、『死出の門松』(講談社文庫)、『看取りのとき』(アスキー新書)など、死と弔い関連の著書を手がける。

WORKS

秋田 光彦

2010年8月から12月まで、大蓮寺と應典院で起きた様々な動きを、レポートします。

法輪は



「喪失」から「出会い」を。死生を学ぶ市民たち。

2000年以来、ほぼ毎月第3木曜に開催されてきた、應典院寺町倶楽部の「いのちと出会う会」が、このたび通算100回目を迎え、それを記念したシンポジウム「地域をつなぐ、いのちの絆」が11月23日に開催されました。中高年が自らの生と死を語りあう、この集いは、代表世話人の石黒大園さんが奥様とご子息を相次いで亡くされた体験が出発点となっています。いわば「喪失」から始まった「出会い」の場であり、毎回

いのちをテーマに、多彩な話題提供者を招いて運営されています。その10年間、100回を走り抜いた、石黒さんの持久力に敬服です。

100回記念では、石黒さんに加え、在宅医療に取り組む長尾和宏医師や、口笛演奏家もくまさきさん、そして私も参加して、同会の足跡をふりかえりながら、これからの医療や看取り、死生観などについて話し合いました。石黒さん、本当にありがとう！

11月23日



いのちと出会う会100「地域をつなぐ、いのちの絆〜いきいきと生きて、安心して最期を迎える地域とは」

スピリチュアルケアとは言わない スピリチュアルケア。

病院で死を語ることはタブーとされてきましたが、今や市民が死を学ぶ時代。11月20日、府立急性期・総合医療センターにて「生と死を、今考える〜がん医療とスピリチュアルケア」というシンポジウムが開催、私もゲストのひとりとして出講しました。公立の、700床以上の大型病院が主催で、しかも会場は医師や看護師さんも含め200人以上で埋め尽くされ、時代の変化を感じました。

じつはこのシンポジウム、私もお手伝いすることになった相愛大学と同センターの連携事業として企画されており、

大学からは釈徹宗教授、打本未来講師なども一緒に登壇。私は、「スピリチュアルケアとは言わないスピリチュアルケア」を提唱しました。

本来、スピリチュアリティとは生活や暮らしの中にあるもので、自分たちがさまざまな関係性の中から育んでいくもの。大蓮寺の「エンディングを考える市民の会」や、應典院の「いのちで出会う会」などの活動も、広い意味で市民が自らスピリチュアリティに気づく、たいせつなケアフルな場といえるのではないのでしょうか。



「生と死を、今考える」チラシ

11月20日

「信の共同体」の再構築を。 場所を開くことの意味を実践から訴える。

本誌2号での既報のとおり、9月5日、東洋大学で開催された日本宗教学会第69回学術大会第15分科会のパネル討論に、徒弟の山口洋典（應典院主幹）が出講、コメンテーターを務めました。討論のテーマは「ソーシャル・キャピタルとしての宗教-日韓英米の現状」で、大阪大学の稲場圭信先生が代表を務める「宗教の社会貢献活動研究プロジェクト（「宗教と社会」学会の中に設置）」のメンバーを中心に企画されたものです。

その概要は既記に上記プロジェクトのホームページ (<http://keishin.way-nifty.com/scar/>) にも

掲載されています。欧米と日本の比較研究（稲場圭信・大阪大学）、伊勢神宮参詣者の属性調査（板井正斉・皇學館大学）、山形県の羽黒修験登拝者の共同体への質的研究（長澤社平・南山宗教文化研究所）、市民の態度と宗教団体の所属の特性への世界統計からの統計分析（寺沢重法・北海道大学）、宗教と福祉の関連についての日韓比較（濱田陽・帝京大学）と、多岐にわたる発表に対し、山口は、應典院がまちと「呼吸するお寺」を志向した背景を紹介し、社会課題と接続した場所を開くことを通じて「信の共同体」の再構築が可能ではないかと指摘しました。

無縁社会を結縁社会へ。 アートは都市を再生するか。

凋落都市・大阪をアートで再生しようと、最先端のアーティストやプロデューサーによる連続セミナー「CITÉトークセッション2010「現代アートと大阪のまちづくり」」が開催、12月6日の最終回に私も出講させていただきました。

久々のアートのレクチャーでしたが、無縁都市・大阪にいかにか結縁の糸を縫いこんでいくのか、應典院のアートワークを中心に話をしました。最近注目の「文化消費」「文化集客」も結構ですが、個人の内面を変容させるアートの力が、都市再生の有効な手だてになるのではないかと、アートと宗教性の関連にふれました。

会場は新しくできた商業ビル、淀屋橋 odona。場所柄、スーツ姿の男性も多数参加されていました。しかし、テカテカのオシャレな空間での講演に、ちょっと引いてしまいました。

12月6日



「いま大阪でアートに求められるもの」会場風景（シー・ディー・アイ提供）



10月16~17日

生と死の共生ワークショップ4（看取りの場を想像する：10月17日午前）

あなたは誰に看取られたいか？ 転じて、自分は誰を看取るのかを考える。

今年で4回目となる「生と死の共生ワークショップ」（主催・シチズンシップ共育企画）が10月16日と17日に開催されました。自死・葬儀・老いに続いた今回、テーマは「あなたは誰に看取られたいか？」でした。

もともとこのワークショップは、主催団体であるシチズンシップ共育企画の川中大輔代表が、私へのインタビューの折に「自分だけがこんな話を聞くのはもっ

たくない」と感じ、身近にいる仲間たちに呼びかけ、「お寺に集まり、住職の話を伺い、意見交換をしよう」と思い立ったことが契機となっています。

参加者11名のうち、半数以上が20代の若者という集いと学びの場では、それぞれが超高齢社会を生きる者として、「看取りの文化」を共に育むきっかけを得たようにも思えます。ゲストには私とご縁の深い、生野区の勝山の「菜の花診療所」

の岡崎和佳子さんをお招きました。私もまた、話題提供者として参加しました。

「お寺で考える生と死は、日常生活で考える場合と、背景の風景が違うことに、尊さがあるように思う」とは共催団体の代表であり、研修の進行役を生業としている青木将幸さんの感想。既に来年のテーマも具体化されつつあり、恒例の催しとしての発展が楽しみです。

「他者への想像力」。
それは、利己的観点からの決別を促す、
自らに投げかけていく「問い」への誠実さ。

■利他は自己犠牲ではない

「電車が遅れた」という駅の放送を聞いて、「つい舌打ちしてしまいましたか?」これは12月5日、應典院で開催された寺子屋トーク第60回にて、大阪大学大学院人間科学研究科の助教・渡邊大さんが発したことばです。利他の取扱説明書「思いやり社会と仏教の実践」と掲げた催しは、大阪大学大学院人間科学研究科の准教授・稲場圭信さんと大阪ボランティア協会の早瀬昇さんの対談に始まり、ビハラー21の大河内大博さん、支縁のまちサンガ大阪の川浪剛さん、京都自死・自殺相談センターの竹本了悟さんの3名の討論と続きました。ちなみに実践家の3名はそれぞれ浄土宗・真宗大谷派・浄土真宗本願寺派の僧侶です。

▼流行語大賞に「無縁社会」がランクインした2010年。年初放送のNHKの番組がきっかけだが、年末にはすっかり定着した。それを裏打ちするような報道も相次いだ。幼児虐待に親殺し。年金欲しさに「消えた高齢者」も相次いだ。もはや無縁ならぬ絶縁社会といったほうが的確か。

▼学生時代、網野善彦さんの名著「無縁・苦界・楽座」で初めて「無縁」という言葉に触れた。日本の中世には寺社を中心とした無縁所という独特の共同体があり、そこには世俗を逸脱した人びと、職人や芸能者、宗教者が集住していた、という。鮮烈な印象と共に、無縁とは束縛されない自由区というイメージが残った。

▼しかし現代の無縁社会は、イコール悪であり絶望とされ、行政サービスや社会保障に頼むしかないと言われる。政治の無策や不正への指弾は絶えないが、それだけが救済なら、結局われわれは権力の支配にすぎない。むしろ無縁だからこそ、そこから生まれる新しいつながりやネットワークに知恵を働かせるべきだろう。家族にせよ地域にせよ、従来の共同体からこぼれおちた人びとを「結縁」するために、宗教者にやれることがあるはずだ。

▼例えば、今号表紙の川浪剛さんも、寺も、檀家もない、釜ヶ崎という独特のエリアで葬送の支援をしようという志に生きる僧侶だ。日雇い労働者や野宿者に寄り添う上では、布教教化の振る舞いは傲慢に映るだけなのかもしれない。

▼布教者としての勇ましい使命感や責任感が棚上げし、ただ対象に寄り添い、共感共苦に生きる態度に、もう一つの仏教者像が窺える。あれこれ建前に惑わず、自分の感覚に正直に行動する。無縁とは、じつは布教エゴに凝り固まった僧侶たちを、一度結縁の淵へと押し戻す、如来の導きではないか。

▼大晦日。大蓮寺と應典院では翌元旦にかけて寺域を開放し、生に疲れ、居場所を失った人びととともに集う「年越しいのちの村」(共催・Live on)を開催した。これもまた、無縁から生まれた、もうひとつの場所だ。(彦)

が例えば、人身事故によって運行に大幅な遅れがもたらされるときもあり得ます。そんなときこそつしななければならなかった人の痛みを思いを馳せることなく「舌打ちをしてしまふ」のはただ自分の都合が乱されることを鬱陶しく思うあらわれではないか、そう問いかけたのです。

稲場さんによると「利他」という仏教語はフランスの社会学者、オギュースト・コントによって「egoism」アルトリズム／アルトルイズム」と呼ばれるようになったとのこと。このことばは、エゴイズム(利己主義)の対義語として位置づけられているのですが、「かといって利他主義は、自己犠牲を求めるものではないはず」と稲場さんは指摘します。この投げかけを、長らく地域に根ざしたボランティア活動を牽引してきた早瀬さんが引き受けました。そこではボランティアに見る利他的な行動は「ほ」とか「へん」という思いが責任感を伴ったとき、他者に受け入れられる行為となり、互いに豊かな関係が生まれる、

と説き、「ボランティアを受け入れる方も、ボランティアを受け入れるというボランティアな行為を見ることができるとです」とことばを添えました。

■責任感ある利他的行為を

今回招いた3名の僧侶は、スピリチュアルケア、貧困問題、自殺対策と、各々のテーマに基づいて利他的行為を行っています。なぜ、そうして活動するのかとの質問に、大河内さんは「主観世界で起こっていることに寄り添う」、川浪さんは「貧しさの中にある体験の豊かさを学びたい」、竹本さんは「どんなときにも絶対に味方になると、そばにいたい」とためたてています。いずれも市民の言語で語られています。僧侶たちにとつての「教え」が後支えになつていると言えます。とはいえ、教義を絶対化し、ましてや「盲従」するのではなく、「教え」の真意を問うことから、時には「教え」の融通の

なさに葛藤しながらも、独自の経験の中で読み込もうとする「臨床僧」の意気を見出すことができます。

誰かの力に頼るとき、当事者の弱さが第三者から指摘されることがあります。しかし、「強い個人を求めた近代社会の反動こそが無縁社会化を促したはず」です。多方面で生きづらさが指摘される今、日々の暮らしの中で「ほ」としてはならないのでは?と想像力を巡らせる必要のある人と場に常に接していることの自覚が、当事者の弱さが受容される契機となるでしょう。その際「教え」を問い直し続けることで、責任感を伴った利他的行為を成立させるように思います。

そこには、教えが権威の経典から跳びだして対話のインターフェイスとなり得るのかという実践的な問いが浮上ります。新たな年を迎え、今回紹介したような仏教を通じて他者に寄り添う実践者の言動を手がかりに、他者を想う力を豊かにする手がかりが見いだされればと願っています。(山口洋典)

サリュ・スピリチュアルvol.3
2011年1月10日発行

編集長:秋田 光彦
編集:山口 洋典・池野 亮光
写真:山口 洋典

発行:大蓮寺・應典院
大阪市天王寺区下寺町1-1-27
(〒543-0076)
電話06-6771-7641
FAX 06-6770-3147
Email info@outenin.com
URL http://www.outenin.com



※本稿は2010年12月24日付の奈良日日新聞に寄稿した内容を大幅に加筆しました。